出品目録

通No.	作品名	制作年	素材	技法	サイズ(㍍)
1	一九四六	2012～2016	油彩	キャンバス	3×20
2	一九四六見守る海1	2017	油彩	キャンバス	2×8.4
3	一九四六見守る海2	2017	油彩	キャンバス	2×8.4
4	一九四六帰路1	2013	油彩	キャンバス	0.8×1.2
5	一九四六帰路2	2013	油彩	キャンバス	0.8×1.2
6	一九四六帰路3	2013	油彩	キャンバス	0.8×1.2
7	一九四六帰路4	2013	油彩	キャンバス	0.8×1.2
8	一九四六帰路5	2013	油彩	キャンバス	0.8×1.2
9	記憶1	2014	油彩	キャンバス	0.8×1.2
10	記憶2	2014	油彩	キャンバス	0.8×1.2
11	一九四六の下絵	2012	紙	墨他	0.2×1.4

一九四六鑑賞のポイント

⑴ 2011年に王先生が偶然目にした写真集に搭載されていた、「遺骨を抱いた男装の少女」が中心部に描かれています。

⑵ 大作「一九四六」では、暗黒の画面に浮かび上がる無数の白くて小さな灯火は、自ら光を放つ「蛍」を表しています。王教授がこの「蛍」を通して表現したかった事は、人間が発する生きる喜びと希望と伺いました。敗戦による悲惨な難民生活を終え、日本帰還の喜びと期待を表現しているのです。また、お盆の頃まで生息する蛍は淡い灯を放ちます。日本人の私は、点滅する蛍の淡い光に、寧ろ日本に帰る事ができなかった50万人近い、残留日本人や集団自決した死者の無念さを感じざるを得ません。

⑶ 絵画には米国と日本船舶が4隻描かれています。右奥の島の先端に停泊している船舶に乗り込もうとして、船の階段を登る邦人難民を目にする事ができます。この階段こそ、希望に繋がる「天国への階段」とも捉えることができるのではないでしょうか？

絵画の右奥では島の先端で海へと続いており、安定した三角形の構図となっています。そしてその右の海は画面の広がりだけでなく、日中の歴史的繋がりを連想させる遇らいが施されています。また、画面上部や右奥の海を遇らうことにより、奥行きの広がりを感じることができます。手前の2隻の船舶へは乗り込みが終わり、これから出航するのでしょうか？

尚、満州からの邦人引揚のために、米国が提供したLST輸送船(戦車揚陸艦)は85隻、リバティ輸送船(戦時標準船)は100隻、病院船は6隻でした。